



医師会 健康講座

市立宇和島病院でロボット手術が
できるようになりました。

市立宇和島病院 泌尿器科（御殿町）岡

明博

早期の前立腺がんに対する治療として手術は重要な方法です。従来は下腹部を10〜15cm切開して開腹前立腺全摘術を施行していました。1990年にフランスの医師らが発表した腹腔鏡による前立腺全摘術が世界に広まり、日本での保険適応は2006年から、当院では2010年に施設認定を取得し、開腹手術から移行してきました。

腹腔鏡手術の利点は傷が小さいことです。前立腺手術の場合、お腹に5〜10mm程度の穴を5〜6カ所開け、内視鏡や手術器具を挿入し実施します。患者さんにとっては体に優しい低侵襲手術となりました。しかし、医師にとってはつらい部分も出てきました。体外から長い器具を挿入し手術をするので力を要します。一度開けた穴は動かさないので、切開、縫合するときに自由度が少なく、技術を要します。術者は横を向いて脇を開けた体勢になることが多く、翌日

は腰痛と肩コリで大変です。技術習得の難しさや施設認定を受ける必要性などから、必ずしも普及しているとはいえないのが現状です。

腹腔鏡手術支援ロボット…ダヴィンチはアメリカで開発されました。①患者さんにドッキングするアーム部分、②それをコントロールするコンソール、③内視鏡やライトを制御するタワーの3つで構成されます。従来の腹腔鏡手術では医師が直接持っていた内視鏡や手術器具をロボットアームに持たせ、術者は3Dモニターつきのコンソールに座り、遠隔操作でロボットアームをコントロールして手術をします。これで医師にも低侵襲な手術となりました。

ダヴィンチの特徴をもう少し詳しく説明すると、以下のとおりです。3D内視鏡で10倍に拡大された視野を確保できること。コンソールローラーの動きに対し、手術器具が動く実際の距離を縮小でき、緻

密な操作ができること。手ぶれ補正機能があること。手術器具の先端に関節があり自由な方向に動かせ、その可動範囲が広いため、従来の腹腔鏡手術ではできない方向への切開、縫合が可能であることなどです。術者は患者さんのお腹の中に顔と手を直接挿入しているような感覚です。精密な手術が楽にできるようになり、医師の技術習得も容易となりました。また、器具が挿入されている1点を支点としてロボットアームが動くため、患者さんの腹壁へのダメージがより少なくなりました。がんの根治性を上げながら、しかも機能の温存も考慮できるというような精密な手術が、より低侵襲におこなえるようになったわけです。

日本では2012年に保険適応となりました。市立宇和島病院では2014年7月から稼働開始し、2015年12月末までに56例の前立腺全摘術を実施しました。大きなトラブルもなく、順調に経

過しています。現在、保険適応があるのは前立腺がんの手術ですが、2016年4月からは腎がんの部分切除に対して保険適応が拡大する予定です。

少し中央とのタイムラグはありますが、また先端医療の1つがこの地域で可能となりました。「いつでも、どんな病気にも、高度医療を提供する病院をめざします。」それが市立宇和島病院の基本方針の1つです。



コンソール：術者が3Dモニターを覗きながらロボットアームを操作しているところ。